

連載〈まつやま 人・彩時記〉②③

近世が生んだ松山の文化人・書と画

# 明月と蔵沢

元松山市考古館長  
伊予史談会会員  
大野 慶一

## 一、はじめに

松山の湊町四丁目銀天街に円光寺という寺がある。この寺の境内に正岡子規の句碑がある。

「冬さびぬ蔵沢の竹明月の書」

この句の中にある蔵沢の竹というのは、吉田久太夫の墨竹の絵を指しており、明月の書というのには、近世になってたえられた、越後の良寛、備中の寂庵、伊予の明月の三人の書家を指す中の明月をいうものであり、この三人は三緇流と称えられている。特に明月の道後温泉詩は圧巻であり、その関連な書は、南面の吉田蔵沢の墨竹の画と並び称されるものである。

また漱石の句の中に

「蔵沢の竹を得てより露の庵」

もあり、伊予の生んだ明月と蔵沢を子規と漱石がこのように誉め賛えている。

## 二、能書家明月上人

明月上人は享保一二年（一七九七）周防国大島（屋代島）に生まれ、幼名を義道といい、後、明逸と改めた。字は曇寧、八月一五日生まれであるので明月と号したという。

他に解脱隠居・化物園とも号した。一五歳で松山円光寺の義空に師事し、二〇歳のころ京阪に遊学して、仏典、漢字を学び徂徠学を修めた。境の南山人（宜周）に寄寓して、晋唐の書に通じ蘇東坡、懷素の書風を研究し、これにならって上達したのである。

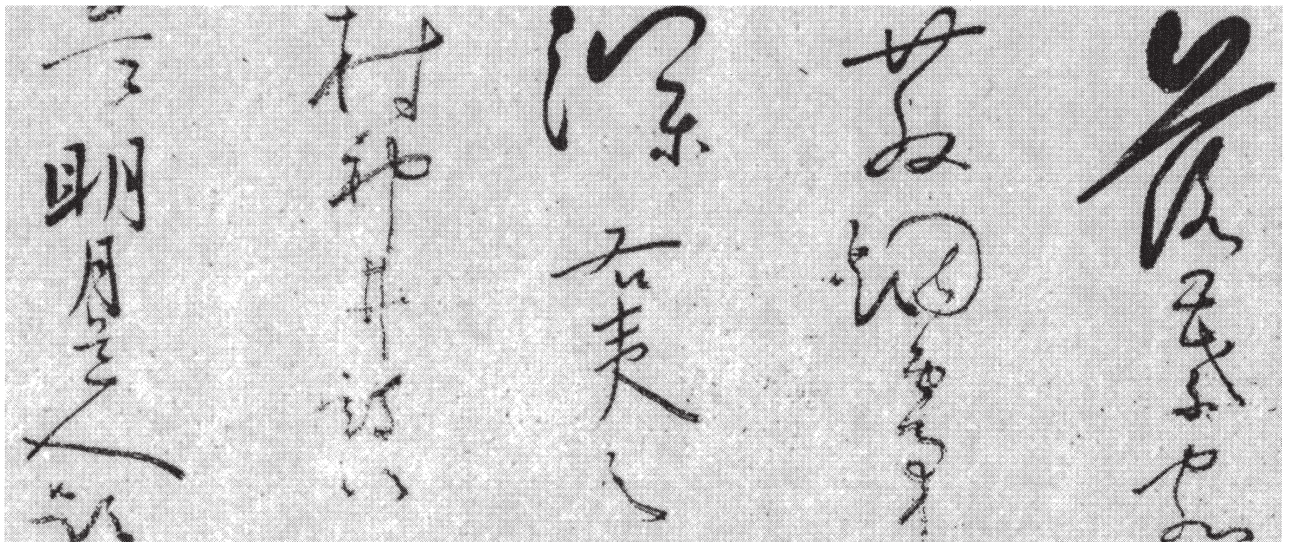
後に円光寺八代を継ぎ、詩文・書に秀で、酒を愛して奇行が多く、前に述べた解脱隠居・化物園主人という号も、五〇歳を過ぎて中の川のある家に隠居したが、その家は化物が出るのを恐れて空き家であつたのを、明月は化物もまた好しと移り住み、「化物園」と名付けたことに由来するという。

生来「たわむれ」「おどける」風があり、五六歳の天明二年（一七八二）中国へ渡ろうと志して、長崎まで行ったが、渡航禁止の法度により果たせなかつたこともある。

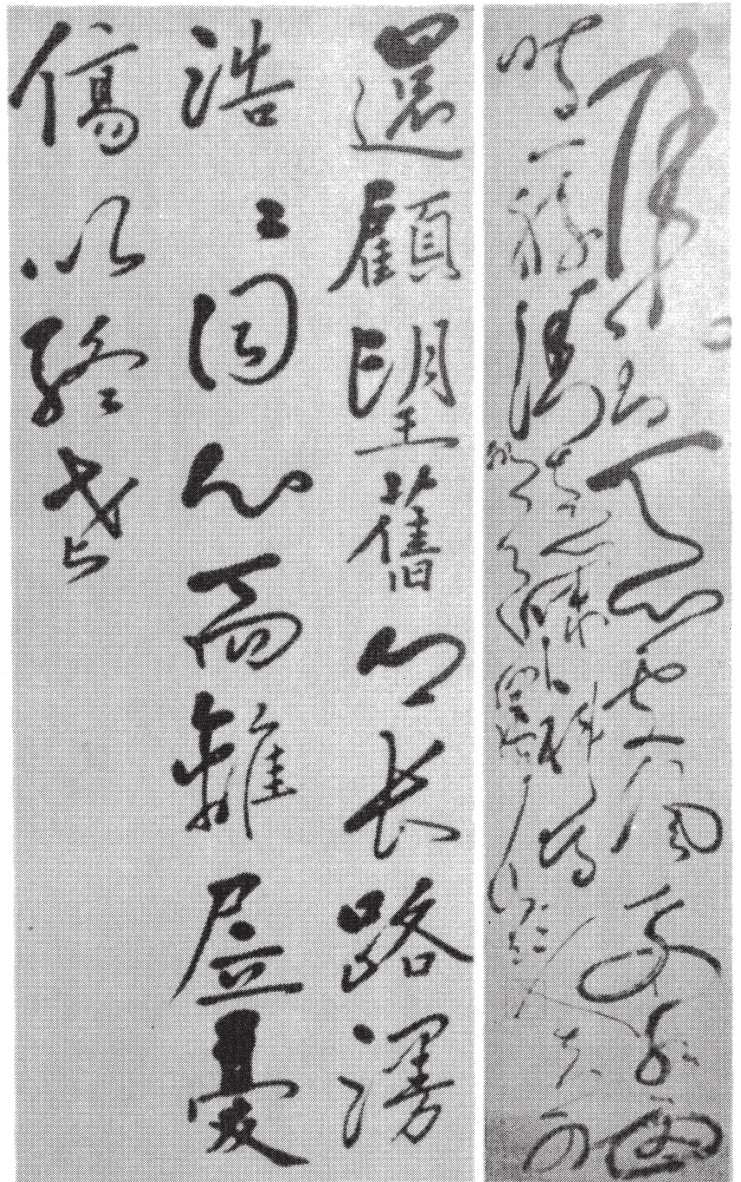
また六八歳で「扶桑樹伝」を発売しメタセコイアという珪化木を知らせたのも彼である。

松山に帰ってからも、当時の明教館の教授である杉山熊台や宇佐美淡斎などを指導し徂徠学の先駆ともなった。

また明月二九歳の宝暦五年（一



明月の書 道後温泉詩



明月和尚書

七五五)には養父である円光寺六世義空が没し、七世義潭があとをついだがまもなく退院し、宝曆一〇年明月が八世となり、翌年、藩の反対を押し切つて唐風の樓門を構え普照樓と名付けるなどの奇骨ぶりを發揮して七〇日の閉門を命ぜられた。上人は平気で昼間から提燈をともし町に出歩いた。「おとがめがあるう……」と皆が心配するの、「夜はお役人も用がござるまい」と昼提燈をかかげて歩いたという。

唐風の樓門というのは松山では西垣生の長樂寺に一つ残っている

### 三、墨竹画の名手、蔵沢

蔵沢は本名を吉田久太夫と称し

だけである。このように奇行も多いが、「却睡草」の中には明月の学問は実学というべきなりと云い、詩・文・書ともに達者で、ことに手跡は抜群の能書で、国中の人が競つて珍重し手に入れようとした。明月は蔵沢の墨竹画とともに松山の宝であり、明快な性格で諧謔に富んでいた。明月は、数々の伝説を残し第八代円光寺の住職となり、寛政九年(一七九七)七〇歳で遷化した。

れつきとした松山藩士である。享保七年(一七二二)に松山で生まれ、四二歳で野間郡・風早郡の代官となり、六二歳で松山藩の物頭を務めた立派な武士で、輝かしい功績と豪放な性格で幾多の逸話を残し、長く武士の規範と仰がれた二百石通りの武人である。蔵沢の墨竹画は多くの熱狂的な愛好者をもちながら、人々の知る機会に恵まれなかった。彼の墨竹は一切の画法を脱皮し、豪快な筆致で竹の本質を描破し、しかも内に豊かな情感がこもり、見る者に比類のない至純な感銘を与えてき

た。作品の清新さ・自由さは、没後一八〇年の歳月を超え、現代の感覚に共鳴し、人々の関心を呼び、池大雅や与謝蕪村と並んで日本美術史の表面に躍り出ている。郷土の者は今も尚、蔵沢の墨竹を秘蔵していることを誇りとしている。筆者も今を去る四〇年前、郷土の日本画の大家、石井南放先生のお伴をして、蔵沢の作品を探し求めに道後の古道具屋へ行つた事を覚えてゐる。蔵沢という武人でありながら南画の大家であり、墨竹画の名手であつたことを知つた最初である。蔵沢の愛用した雀印は、今とさきめく剣豪宮本武蔵の愛用した印章でもあるといわれているが、二人の絵にはよく似通つた共通点があると称されている。武蔵の絵には厳しい勝負の世界を生きる戦国武士の面目が強く、すさまじいまでの氣迫を感じさせられる。蔵沢の絵には温かい人間の情感をこめた陶酔がある。性格は違ふが、ともに武人としての氣魄があふれる武士の絵の双璧とも云うべきものである。蔵沢は号として他に醉桃館・白雲堂・翠蘭亭・不二庵がある。名は良香、通称弥三郎と称し多数の号を持つ。雄渾な墨竹の画に代表される吉田蔵沢は「蔵沢の先に蔵沢なく、蔵沢のあとに蔵沢なし」といわれ、日本南画の黎明期に松山という僻地から孤高で質の高い芸術を忽然として成立させた特筆すべき画家でもある。

彼は、若いころ、自ら代官を志望し、その強硬な自薦運動のため閉門の処罪を受ける。また当時の藩主定喬公に親孝行を直言し、それを聞き入れられて、面目をほどこし、特別な恩賞に浴したこともある。

七十七歳である事件に連座し、名声、家禄も剥奪される。事件の内容は判明しないが、幕府に対する弱腰を批判したことによるらしい。事件に連座した寛政一〇年（一七九〇）には藩政に対する憤懣を



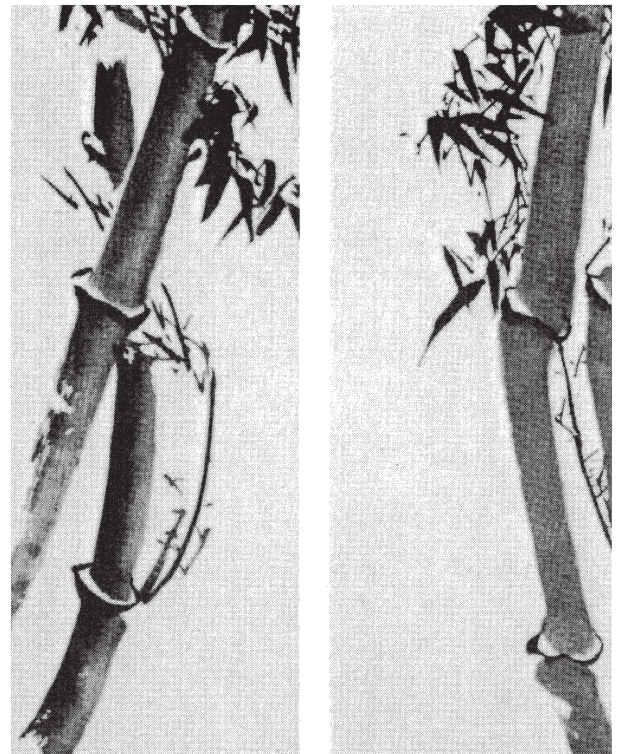
吉田蔵沢筆「久万美術館蔵品図録」

絵筆に託したように狂おしいまでの緊迫感をともなった快作が多い。

八〇歳になってからの蔵沢最晩年の作品には平静で緊密な調和のあるものが多く、蔵沢墨竹の最高傑作といわれている。

江戸中期の支配階層の御用絵師狩野、土佐、住吉派の中で、南画は地方に、しかも武士出身者によって独自の自在な画境を確立した功績は大きい。

特に蔵沢は明月と親交があり、



吉田蔵沢筆「墨竹屏風」(六曲一双部分)



吉田久太夫の墓(松山市・大法寺)

寛政八僧といわれる学僧たち(雲山・蔵山・文明・学信・明月・童麟・妙菴・徳政)との交流を通じて中国の南宗画の動向や作品を学び取ったとも思われる。

蔵沢は享和二年(一八〇二)八一歳で没し、本町五丁目の大法寺に吉田久太夫墓として祀られている。

参考文献  
1 松山市史 第二巻 近世

教員歴38年。愛媛大学附属中学校教諭をはじめ、同中学副校長、砥部中学、鴨川中学の校長などを歴任。また、松山市考古館館長や松山大学の講師も務める。愛媛県の「県史・人物編」の編纂にもたずさわった。出版物に「社会科学史の人物指導」など。



おの けいいち 先生  
大野 慶学 先生  
旅行 趣味

● 執筆者紹介 ●

- 2 愛媛県史 芸術・文化財
- 3 伊予の名僧・傑僧 財団法人愛媛県文化振興財団 越智通敏著
- 4 伊予路の文化 松山市教委